

機関番号：34513

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520425

研究課題名(和文) 九州新幹線開通と市町村合併にともなう九州方言の変容

研究課題名(英文) Sociolinguistics research on transformation of Kyushu dialect

研究代表者 村上 敬一(MURAKAMI KEIICHI)

神戸松蔭女子学院大学・文学部・准教授

研究者番号：10305401

研究成果の概要(和文):2011年春に全線開業した九州新幹線鹿児島ルート(鹿児島、薩摩川内、出水、水俣、八代、熊本、荒尾、大牟田、久留米、鳥栖、福岡)において、高校生と40~50代の男女計約750名に、約110項目のアンケート調査と談話録音調査を実施した。調査結果は、地域差と世代を中心に、社会言語学的視点から統計的な処理を施し、分析を行った。

研究成果の概要(英文):The sociolinguistics investigations of the high school students and the member of societies were executed in Kyushu Shinkansen Kagoshima route. The results of the surveys were given and analyzed statistical processing from the sociolinguistics viewpoint that centered on the regional variation and the generation difference.

交付決定額

(金額単位:円)

	直接経費	間接経費	合計
平成20年度	1,200,000	360,000	1,560,000
平成21年度	1,200,000	360,000	1,560,000
平成22年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：方言学、社会言語学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：社会言語学、グロットグラム、九州方言、肥筑方言、薩隅方言

1. 研究開始当初の背景

現代の地域方言研究は、地域的変異に注目するだけでなく、世代・性・職業などによる社会的変異、さらには言語変化を推進する人々の意識や志向にも注目が集まっている。そこで、方言地図の中にさまざまな社会言語学的情報を取り込む「パーセント・グロットグラム」(以下、PG)を用い、新幹線の全線開通を控えた九州をフィールドとして、方言変容の普遍的なモデルの構築を目指した。

2. 研究の目的

(1) 新幹線の開通という交通網再編、市町村

合併という地域社会の再編の過程において起こる地域方言のダイナミックな変化をPGによって描き出す。

(2) 調査結果を過去のものと比較・検討することによって、地域方言のみならず言語一般の変化・接触・干渉・融合などの現象について、そのメカニズムを理論的に解明することを目標とする。

3. 研究の方法

(1) 九州新幹線の部分開通段階における調査結果との比較を行なうことで、代表者らが

行なった約 10 年前の調査結果との違いを観察する。近い将来、全線開通後に三度目の調査を行なうことで、三段階における当該方言の変容の実態を明らかにする。

(2) PGを用いることで、性差、職業差などのさまざまな社会的属性を背景にもつ多人数を対象とした、統計的な情報を示す。また、調査地点(地域)間の地理的關係だけでなく、言語接触・言語伝播に重要な役割を果たす交通路(本研究の場合は新幹線)の情報を提供できる。

4. 研究成果

(1) 下図は断定辞「雨だ」の地域差を、グロットグラムによって表したものである。

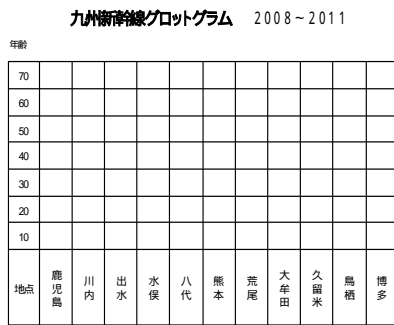


図 きょうは雨だ

だ じゃ や

鹿児島では若い世代から共通語形の「だ」が広がりを見せている。熊本では、伝統的の方言形も共通語と同じ「だ」であったが、若い世代から福岡方言化が進み「や」の浸透が確認できる。福岡では「や」の勢力が根強い。

(2) 下図は断定辞「雨だ」の地域差を、PGによって表したものである。グロットグラムで

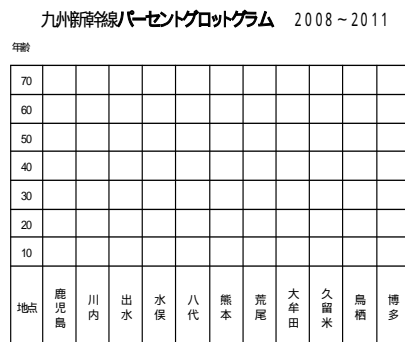
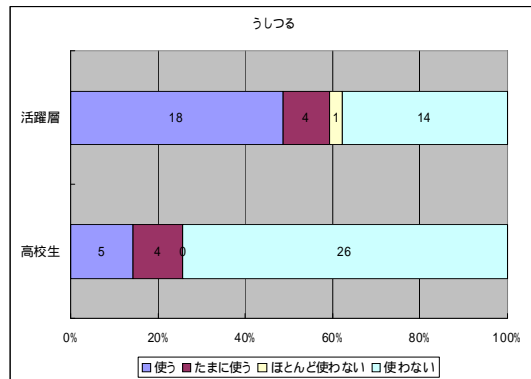


図 きょうは雨だ

だ 60%以上
だ 30%以上~60%未満
だ 30%未満

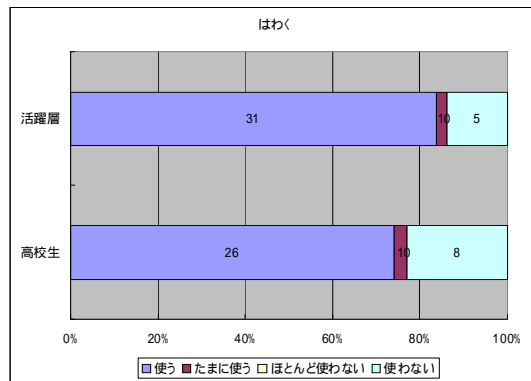
表すよりも、変化の様相が明確に表される。

熊本で「だ」の使用が若い世代ほど減少し、他の形式(この場合は「や」と交替している。福岡でも若い世代から共通語形「だ」が徐々に浸透しているといえる。



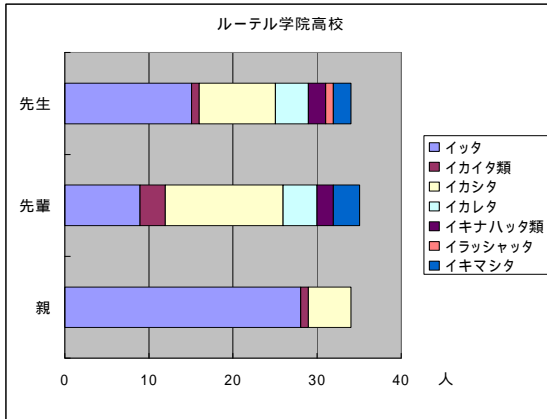
(3) 上図は「伝統的方言の衰退」の事例として、水俣市における「うしつる」の使用実態である。「うしつる」からは標準語の「失う」が連想できるものの、口語的ではないから、標準語の「捨てる」に取って代わられていく感がある。地域方言において、上の世代と若い世代では使用語彙が異なるという、地域方言の多重性、多層化の一端をみることができる。

(4) 下図は「伝統的方言の保持」の例として、

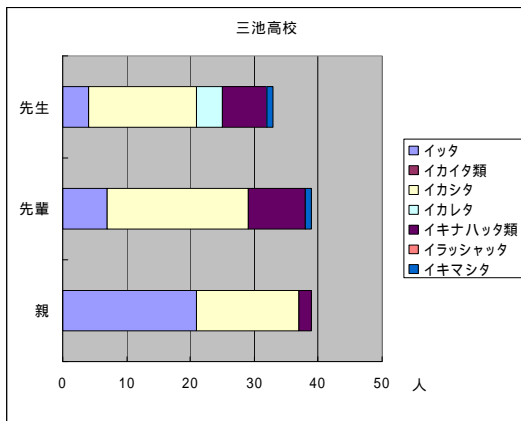


水俣市における「はわく」の使用実態である。「使う」「たまに使う」を合わせると、活躍層で8割を超え、高校生でも8割に近い。現在では、北部、西部九州で盛んに使用されており、改まった場や公的な場、児童・生徒の作文にも使われることが多い、方言意識の極めて低い語である。標準語の「はく」と語形が近いこと、語の分布域が広く標準語との接触が少ないこと、学校など公的な場でも盛んに使用されることなどが、高い使用率につながっていると思われる。

(5)下図は、熊本市の高校生において、友だちに「 は東京に行った」と言うときの「行った」に当たる部分の言い方を尋ねたものである。伝統的な方言形式として軽い敬意を表す「行かした」の使用をみると、対校長先生よりも対先輩場面での使用が多くなっているのが特筆される。軽い敬意を表すというよりは、方言形としての親しみを表す機能を「行かした」が持っていると言える。高校生における、新しい「行かした」の使用である。



(6)下図は、大牟田市の高校生において、友だちに「 は東京に行った」と言うときの「行った」に当たる部分の言い方を尋ねたものである。伝統的な方言形式として軽い敬意を表す「行かした」の使用が保持されていて、対校長先生と対先輩場面での使用が多くなっている。身内尊敬用法としての用法もみられ、対親にも使用されている。



(7)次表は、今後の言語変化の方向性や、場面による標準語と地域語の使い分けの状況を予測するひとつの手段として、熊本県水俣市と鹿児島県域における地域の方言（地域

語）に対する考え方を表にまとめたものである。

「地域語に対する誇り」は、今後のさらなる地域社会の変容と連動していくものと考えられる。インフラの整備によって都市と地方の平準化も進んでいる。ことばの面では、都市部のことばに対する地域語の引け目、負の側面が意識されるいっぽうで、標準語と地域語の使い分けの意識が明確な高校生も多いことがわかる。

	地域語の標準語化	地域語への好悪	地域語への誇り	標準語使用の努力
鹿児島	しかたない	好き	感じる / どちらとも	ない
川内	しかたない	どちらとも / 好き	どちらとも	ない
出水	しかたない	好き	どちらとも	ない
水俣	よくない / しかたない	好き	感じる / どちらとも	ない

今後の言語変化を予測するにあたり、今回の調査結果は、標準語や地域語、地域の中核都市のことばによって、地域言語の多層化現象がますます促進されることを物語っている。

(8) 次頁の表は(7)と同じく、東京、大阪など各地の言語に対する意識まとめたものである。いずれの地域でも「大阪に魅力を感じる」という回答がもっとも多い。2番目に多い回答では、鹿児島と川内で東京と福岡、地元の鹿児島が拮抗する。先述の通り、地域語に対する好悪、誇りについてプラス意識を持つ傾向が指摘された鹿児島と、中立的な意識を持つ傾向にあった川内であるが、東京のことばに対する魅力については、似たような傾向をみせる。福岡のことばに対する魅力は、新幹線開通による心理的距離の短縮、九州における拠点都市としての、福岡の経済的、文化的な影響が背景にあるだろう。新幹線の全線開通後は「魅力がある」とする回答が増加する可能性を含んでいる。

出水と水俣では、大阪に次いで県庁所在都市の鹿児島、熊本に魅力を感じるという回答が多い。出水市は鹿児島市から、水俣市は熊本市から、離島を除いてもっとも離れた市である。県単位でみたとき、最周辺部にある地域としての共通現象といえるか。出水は、隣接県の熊本市が最下位であるのに対して、水俣では東京都が最下位となる。東京志向については傾向が異なる。

	魅力ある都市のことば	似ている都市のことば
鹿児島	大阪、福岡、東京	鹿児島、東京、熊本
川内	大阪、福岡、鹿児島	鹿児島、熊本、東京
出水	大阪、鹿児島、福岡	鹿児島、熊本、東京
水俣	大阪、熊本、福岡	熊本、福岡、東京

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

村上敬一「地域方言の変容と多層化に関する事例研究 その1 - 熊本県水俣市方言調査から - 」『文林』43、査読無、2009、p1 - p16

村上敬一「地域方言の変容と多層化に関する事例研究 その1 - 九州新幹線沿線の方言調査から - 」『文林』44、査読無、2010、p1 - p17

[学会発表](計1件)

村上敬一「地域交通網の再編と市町村合併にともなう方言の変容」『2011年応用日本語学術研究会』台湾・育達商業科技大学

6. 研究組織

(1)研究代表者

村上 敬一 (MURAKAMI KEIICHI)
神戸松蔭女子学院大学・文学部・准教授
研究者番号：10305401

(2)研究分担者

二階堂 整 (NIKAIDO HITOSHI)
福岡女学院大学・人文学部・教授
研究者番号：60221470
太田 一郎 (OTA ICHIRO)
鹿児島大学・法文学部・教授
研究者番号：60203783